

修学旅行の観光名所

■金閣寺(鹿苑寺)

1. 概要

鹿苑寺(ろくおんじ)は、京都市北区にある臨済宗相国寺派の寺。相国寺の山外塔頭寺院。寺名は開基である室町幕府3代将軍足利義満の法号・鹿苑院殿にちなむ。義満の北山山荘をその死後に寺としたものである。舍利殿は室町時代前期の北山文化を代表する建築であったが、昭和25年(1950年)に放火により焼失し、昭和30年(1955年)に再建された。平成6年(1994年)にユネスコの世界遺産(文化遺産)「古都京都の文化財」の構成資産に登録されている。

2. 歴史

元は藤原公経(西園寺公経)が西園寺を建立し、併せて山荘(「北山第」)を営んでいたが、室町幕府3代将軍足利義満が河内の領地と交換に西園寺家から譲り受けた。当時「北山殿」または「北山第」と呼ばれた。応永15年(1408年)に義満が死亡すると、後に北山第は義満の遺言により禅寺とされ、義満の法号「鹿苑院殿」から鹿苑寺と名付けられた。庭園は文化財保護法により特別史跡・特別名勝に指定されている。

3. 境内

(1)舍利殿(金閣)

金閣は木造3階建ての楼閣建築で、鹿苑寺境内、鏡湖池(きょうこち)の畔に南面して建つ。屋根は宝形造、柿(こけら)葺きで、屋頂に銅製鳳凰を置く。初層は「法水院」、奥に須弥壇を設け、壇上中央に宝冠釈迦如来坐像、向かって左に法体の足利義満坐像を安置する。二層は「潮音洞」、仏間内部は、須弥壇上に観音菩薩坐像(岩屋観音)を安置し、須弥壇周囲には四天王像が立つ。三層は「究竟頂」(くつきょうちょう)といい、仏舎利を安置する。初層が蔀戸を用いた寝殿造風、二層が和様仏堂風であるのに対し、三層は花頭窓を用いた禅宗様仏堂風とする。

(2)方丈

本堂に相当。単層入母屋造で棧瓦葺。延宝6年(1678年)、後水尾天皇の寄進により再興された。

(3)陸舟(りくしゅう)の松

方丈北側にある足利義満手植えと伝えられる松。京都三松の一つ。

(4)銀河泉(ぎんがせん)

足利義満がお茶の水に使ったと伝えられる泉。

(5)巖下水(がんかすい)

足利義満が手洗いに用いたと伝えられる泉。

(6)夕佳亭(せっかてい)

金森宗和好みと伝えられる茶室。現在の建物は明治7年(1874年)に再建されたもの。床柱は茶席としては珍しく南天の木が用いられており、よく知られている。

(7)庭園

金閣を水面に映す鏡湖池(きょうこち)を中心とする池泉回遊式庭園で、国の特別史跡・特別名勝に指定されている。鏡湖池には葦原島、鶴島、亀島などの島々のほか、畠山石、赤松石、細川石などの奇岩名石が数多く配されている。

(8)不動堂

天正年間に宇喜多秀家が再建したとされ、金閣寺境内に現存する最も古い建物。本尊は空海(弘法大師)作の伝承を有する石不動明王。江戸期から既に庶民信仰の対象であった。

◆金閣寺に関連する事項:

室町幕府: 三代将軍 足利義満の別邸。生存時には北山第(又は北山殿)と称される。

足利義満が没してから、義満の院号、鹿苑院殿、から鹿苑寺と称されるようになる。

足利 義満(あしかが よしみつ)とは、室町時代前期の室町幕府第3代将軍(在職 1368 年 - 1394 年)である。父は第2代将軍足利義詮、母は側室の紀良子。

南北朝:

南北朝の合一を果たし、有力守護大名の勢力を押さえて幕府権力を確立させた。(詳細後述)

北山文化:

鹿苑寺(金閣)を建立して北山文化を開花させるなど、室町時代の政治、経済、文化の最盛期を築いた。

義満が邸宅を北小路室町へ移したことにより、義満は「室町殿」とも呼ばれた。後に足利将軍を指す呼称となり、政庁を兼ねた将軍邸は後に歴史用語として「室町幕府」とばれることになった。

1397 年(応永 4 年)には西園寺家から京都北山の「北山第」(ほくさんてい)を譲り受け、舍利殿(金閣)を中心とする山荘(「北山第」(きたやまてい)または「北山殿」(きたやまどの)、後の鹿苑寺)を造営した。

1399 年(応永 6 年)春以降、義満は本格的にこの山荘に移り住み、活動の拠点としていく[26]。この時代の文化を、武家様・公家様・唐様(禅宗様)が融合した北山文化と呼ぶことも多い。また北山文化の芸能である猿楽では、義満は観阿弥・世阿弥父子を庇護した。

また、足利義満が建設を進めた特筆すべき建築物として、1399 年に京都相国寺に完成した八角七重塔がある。塔の高さは、360 尺(約 109m)に及ぶ高層建築物であり、以後 500 年以上、日本最高記録となっていた。相国寺の七重塔は、4 年後に落雷により焼失したが、翌年の 1404 年には同等規模の北山大塔を金閣寺付近に建設したという。

勘合貿易:

義満は明との正式な通交を望んでいた。しかし 1374 年(応安 7 年)の遣使では、明側は南朝の懷良親王を「日本国王良懷」として日本における唯一の正規な通交相手として認めていた事と、

天皇の臣下(全ての民の君主である中国皇帝から見て、その家臣である天皇の家臣は陪臣)との通交は認めない方針のため、幕府の交渉は実らなかった。

1380 年(康暦 2 年)にも「日本国征夷将軍源義満」名義で交渉を始めようと試みるが、これも天皇の家臣との交渉は受けないとの理由と、宛先を丞相にしたという理由で入貢を拒まれている。

そこで義満は応永元年 12 月(1394 年)に太政大臣を辞し、出家した。これにより義満は天皇の臣下ではない自由な立場となった。

墓所: 等持院に足利義満の墓とされる塔がある。

法名は鹿苑院天山道義。等持院で火葬された義満の遺骨は、相国寺塔頭鹿苑院に葬られた。以後相国寺は足利将軍の位牌を祀る牌所になったが、天明の大火で灰燼に帰して衰微した。鹿苑院に至っては明治になってから廃仏毀釈のあおりで廃寺の憂き目に遭う。そのため義満の墓所はその正確な位置が不明となってしまったが、位牌は足利家と縁の深かった臨川寺に移され安置されている。

■龍安寺

1. 概要

龍安寺(りょうあんじ)は、臨済宗妙心寺派の寺院。石庭で知られる。本尊は釈迦如来、開基(創建者)は細川勝元、開山(初代住職)は義天玄承である。「古都京都の文化財」として世界遺産に登録されている。

2. 歴史

「石庭」として知られる枯山水の方丈庭園で有名な龍安寺は、室町幕府の管領、守護大名で、応仁の乱の東軍総帥でもあった細川勝元が宝徳2年(1450年)に創建した禅寺。衣笠山山麓に位置する龍安寺一円は、永観元年(984年)に建立された円融天皇の御願寺である円融寺の境内地であった。

円融寺は徐々に衰退し、平安時代末には藤原北家の流れを汲む徳大寺実能が同地に山荘を建立した。この山荘を細川勝元が譲り受け寺地とし、初代住職として妙心寺8世(5祖)住持の義天玄承(玄詔)を迎えた。義天玄承は師の日峰宗舜を開山に勧請し、自らは創建開山となった。

龍安寺は、開基細川勝元らと守護大名山名持豊(宗全)らが争った応仁の乱(1467-1477年)によって焼失するが、勝元の子の細川政元と4世住持・特芳禅傑によって、明応8年(1499年)に再興された。寺では特芳を中興開山と称している。その後、織田信長、豊臣秀吉らから寺領を付与されている。

絵入りの名所案内書(現代の旅行ガイドブックに相当)である『都名所図会』(安永9年(1780年)刊行)を見ると、当時、龍安寺の鏡容池はオンドリの名所として知られており、今日有名な石庭よりも、池を中心とした池泉回遊式庭園の方が有名であった。

寛政9年(1797年)に京都奉行所へ提出された古地図には23か寺の塔頭があったが、寛政9年(1797年)の火災で方丈、仏殿など主要伽藍が焼失したため、塔頭の西源院の方丈を移築して龍安寺の方丈(本堂)とし、現在にいたっている。

その後、明治初期の廃仏毀釈によって衰退するが、イギリスのエリザベス2世が1975年に日本を公式訪問した際、龍安寺の拝観を希望し、石庭を絶賛したことが海外のマスメディアでも報道された。

そのため、昨今では世界各地での日本のZEN(禅)ブームと相俟って、世界的にも知られるようになった。

3. 境内

(1) 鏡容池

寺の南側には広大な鏡容池があり、周囲は池泉回遊式庭園になっており、年間を通じて四季それぞれの花を楽しむ(国の名勝)。境内北側には庫裡、方丈、仏殿などが建ち、これらの西側には「西の庭」がある。西の庭には開基細川勝元の木像を祀る細川廟がある。有名な石庭は方丈南側にある。

(2) 方丈(重要文化財) -

元の方丈が寛政9年(1799年)の火災で失われた後、塔頭の西源院方丈を移築したもので、慶長11年(1606年)の建立である。本来ここには狩野派の手による襖絵があったが、それらは明治初期の廃仏毀釈の影響により寺から出て散逸してしまった。現在のものは昭和30年頃に皴月鶴翁によって描かれたものである。

(3) 方丈庭園(石庭)

方丈庭園(史跡・特別名勝)－いわゆる「龍安寺の石庭」である。幅 25 メートル、奥行 10 メートルほどの空間に白砂を敷き詰め、東から 5 個、2 個、3 個、2 個、3 個、合わせて 15 個の大小の石を配置する。

これらの石は 3 種類に大別できる。寺伝では、室町末期(1500 年頃)特芳禅傑らの優れた禅僧によって作庭されたと伝えられるが、作庭者、作庭時期、意図ともに諸説あって定かではない。

堀ぎわの細長い石には「小太郎・口二郎」と刻まれており、作庭に関わった人物と推測されるが、憶測の域を越えるものではない。

この庭は石の配置から「虎の子渡し」の庭」や「七五三の庭」の別称がある。

「虎の子渡し」とは、虎は、3 匹の子供がいて、そのうち 1 匹は必ずどう猛で、子虎だけで放っておくと、そのどう猛な子虎が他の子虎を食ってしまうという。

そこで、母虎が 3 匹の虎を連れて大河を渡る時は次のようにする。母虎はまず、どう猛な子虎を先に向こう岸に渡してから、いったん引き返す。

次に、残った 2 匹のうち 1 匹を連れて向こう岸に行くと、今度は、どう猛な子虎だけを連れて、ふたたび元の岸に戻る。その次に、3 匹目の子虎を連れて向こう岸へ渡る。

この時点で元の岸にはどう猛な子虎 1 匹だけが残っているので、母虎は最後にこれを連れて向こう岸へ渡る、という中国の説話(虎、彪を引いて水を渡る)に基づくものである。

また、「七五三の庭」とは、東から 5、2、3、2、3 の 5 群で構成される石組を、5 と 2 で七石、3 と 2 で五石、そして 3 で三石と、七・五・三の 3 群とも見られることによる。古来より奇数は陽数、すなわちおめでたい数とされ、その真ん中の数字をとったものである。

この石庭は、どの位置から眺めても必ずどこかの 1 つの石が見えないように配置されていることでも有名である。

4. 文化財

(1) 知足の蹲踞(つくばい)

茶室蔵六庵の露地にある。蹲踞は茶室に入る前に手や口を清めるための手水鉢のこと。水戸藩主徳川光圀公の寄進によるものと伝えられている。

一見「五・隹・疋(但し、上の横棒がない)・矢」と読めるが、水溜めに穿った中心の正方形を漢字部首の「口」と見れば「吾れ唯だ足ることを知る」となる。

「知足のものは貧しいといえども富めり、不知足のものは富めりといえども貧しい」という禅の格言を謎解き風に図案化したものである。

5. エリザベス女王、

1975年に拝観。(43年前)。このエリザベス女王の拝観後、この龍安寺がポピュラーな観光寺院となる。

■銀閣寺

東山の麓、五山送り火で知られる大文字山麓に、慈照寺(じしょうじ)はある。銀閣寺(ぎんかくじ)とも呼ばれる。山号は東山(とうざん/ひがしやま)という。

寺号は、足利義政の法号「慈照院殿准三宮贈大相國一品喜山道慶」に因る。俗称の銀閣寺は観音殿の通称であり、江戸時代に足利義満造営の金閣寺に対して呼ばれるようになったという。

臨済宗相国寺派、相国寺の山外塔頭(別格地)の一つ、本尊は宝冠釈迦如来坐像。

1994年、「古都京都の文化財」17の資産(社寺城)の一つとして、世界文化遺産に登録された。

室町時代、1465年、室町幕府8代将軍・足利義政は伊勢貞親に命じ、鹿ヶ谷に山荘の予定地を検じさせた。南禅寺塔頭・恵雲院(えうんいん)の地だったという。

1466年、義政は、東山恵雲院付近に山村造営の計画を立てた。美濃に材木を求める。

1473年、義政は長氏・義尚に将軍職を譲り、浄土寺跡に山荘建立の工事を始める。

1482年、浄土寺山麓の跡地(墓地)に、義政により東山山荘(東山殿)が営まれた。

東山殿の名は、第103代・後土御門天皇により贈られた。山荘造営のための段銭、夫役を課す。

1486年、義政の持仏堂として東求堂が建てられる。西指庵門が建てられた。

1487年、義政は東山殿観音殿造営に伴い参照のために鹿苑寺に参詣する。

1489年、現在の観音殿(銀閣)が上棟される。『蔭涼軒日録』

1490年、義政は山荘で亡くなる。

その没後、遺命により東山山荘(東山殿)を臨済宗相国寺派の禅寺に改める。持仏殿を仏殿とした。臨済宗の僧・夢窓国師を追請(勸請)開山とし、相国寺の宝処周財を迎えた。寺号は義政の院号・慈照院殿喜山道慶に因み慈照寺になる。以後、歴代は相国寺より入寺した。

1491年、慈照院は慈照寺と改名され、東求堂が本堂とされた。

2007年、学術調査により、当初より銀閣に銀箔が貼られていなかったことが判明する。

◆足利義政 室町幕府8代将軍・足利義政(あしかが よしまさ、1436-1490)。父・義教の暗殺、兄の早世により、9歳で家督を継ぎ、1449年、14歳で室町幕府8代将軍に就いた。

1455年、正室になった日野富子との間に嫡子はなく、1464年、弟・義視(よしみ、義尋)を後継者とする。だが、1465年、実子・義尚の誕生により、将軍職を巡る抗争になった。

義政側の山名宗全と、義視側についた細川勝元、さらに管領家の斯波、畠山氏、諸大名を巻き込んだ応仁・文明の乱(1467-1477)になる。1473年、義政は実権を8歳の子・義尚に譲り隠棲し、1485年、出家し喜山道慶と名乗る。最晩年の義政は、銀閣寺の造営に固執した。だが、1489年、後継者の義尚は24歳で早逝する。その跡を追うように、翌年、義政も急逝した。

学問、芸術、和歌などに優れた。死の直前まで観音殿の内装について指示を出したという。だが、その完成を見ることはなかった。義政の歌「何事も夢まぼろしと思ひ知る身にはうれひも悦びもなし」。

◆足利義視 室町時代の武将・足利義視(あしかが よしみ、1439-1491)。義教の子、義政の弟。1443年、浄土寺に入室させられ義尋と称した。1464年、義政の後継に指定された。還俗して義視と改名、1465年、参議・左中将、権大納言に進む。富子に義尚が生まれると将軍家跡目争いとなる。1466年、義視暗殺を計画が起こる。1467年、応仁の乱により義視は伊勢に逃れ、西軍に投じ将軍格となる。乱後は、美濃茜部に寓居した。1490年、義政の死で嫡男義材(義植)の後見となり、義材任官、准後の宣を受けた。

◆善阿弥 室町時代の庭師・善阿弥(ぜんあみ、1386-1482)。名手とされ、相国寺の『蔭涼軒日録』に「河原者善阿弥」として登場する。同朋衆として足利義政の寵愛を受けた。作庭はほかに花の御所など。

◆仏像・木像 ◆方丈に秘仏の本尊「宝冠釈迦如来坐像」が安置されている。南北朝時代作という。高く結いあげた髻(もとどり)に宝冠を被り定印を結ぶ。2尺(60cm)の坐像で、鳴滝三宝院の僧・日護の作という。当初は盛上げ彩色が施されていたという。檜材、寄木造、玉眼嵌入。

◆脇に、「達磨大師坐像」(55.8cm)を安置する。口には歯が見えている。江戸時代作になる。朱に彩色の衣、頭に法衣を被る。その下前に彩色の開山・「夢窓国師像」がある。

◆東求堂は、かつて足利義政の持仏堂であり、阿弥陀三尊像を安置していた。現在は、仏間須弥壇厨子内に、室町時代の秘仏「阿弥陀如来立像」(65cm)を安置する。与願施無畏の来迎印を結ぶ。衣文は截金彩色。舟形光背。快慶の安阿弥様式。かつては、阿弥陀三尊像、障子に狩野正信筆「十僧図」が描かれていたという。

◆東求堂仏間の西に、室町時代作の「足利義政像」(118cm)がある。法衣姿であり、等身大の結跏趺坐、禪定印を結ぶ。没後間もなく造立されたとみられ、1485年に出家した頃の姿を写實的に表している。木造、寄木造、彩色、玉眼嵌入。その北に位牌棚がある。

◆銀閣初層の心空殿、奥の間の須弥壇、唐破風厨子内に室町時代初期作の「地藏菩薩坐像」、「千体地藏菩薩立像」を安置する。

◆銀閣上層の潮音閣の須弥壇に、室町時代の秘仏「観音菩薩坐像」(54cm)を安置する。憂いある表情に結跏趺坐、定印を結ぶ。なお、後補の光背の背後に木造洞窟(岩屋)が付き、洞中観音ともいう。岩洞は建仁寺より移されたともいう。岩屋観音像ともいわれる。台座も後補になる。

◆東山文化 東山文化の舞台になった東求堂内の書斎屋「同仁斎(どうじんさい)」は「聖人視而同仁斎」(聖人は人によって区別することなく、平等に仁愛を施すの意)から名付けられた。現存する最古の書院造になっており、四畳半茶室の原型と伝えられている。

義政は、諸芸の達人を身分の分け隔てなく東求堂に集めたという。特に、同朋衆と呼ばれた画家、茶人、連歌師でもあった能阿弥とその子・芸阿弥、善阿弥などが集った。能阿弥は義教、義政に仕え、書画などの鑑定、管理、東山御物の選定を行った。さらに、書院飾りも手がけた。これらの東山文化とは、禅そのものではなく、禅趣味に連なる美意識との見方もある。

◆銀閣寺建立の経緯 1482年、浄土寺山麓の跡地(墓地)に、東山山荘(東山殿)が営まれた。

義政は造営にあたり資金調達のために、諸国荘園、守護から税を徴収しようとした。だが戦乱、1460年の寛正の大飢饉後の社会混乱から拒否される。そのため、大名、寺社、農民に「御山荘御要脚」「要脚段銭(たんせん)」「御普請料」などの税を強引に課した。本来は御所造営に充てられるべきものだった。また、分一徳政令と分一徳政禁制を交互に使い、債権者、債務者の双方より分一銭を徴収した。関所は廃止し、新たに京都七口に関銭を課した。

義政は、山城国内の荘園領主に、費用のみならず人夫を毎年課した。社会の混乱、重税などに対し、1485年に山城国一揆が起きる。それでも、山荘の造営が中止されることはなかった。また、義政は、造営に際して、京都・奈良などの大乘院、長谷寺、東寺、等持院などから資材、名石や庭木を持ち出し、庭を整えたといわれている。このため、義政没後、もとの持ち主がこれらを取り返した。後世、織田信長は、1569年の二条城造営に際し、当寺から九山八海石を移したという。

◆創建時の建築 山荘の建設は、室町時代、1482年-1490年の8年間続けられた。建物は、義政の祖父・義満の残した西芳寺の徹底した模倣が行なわれた。建築資材は、奈良初瀬山の檜材による。

◆東求堂「東求(とうぐ)堂」(国宝)は、本堂の東にある。室町時代、1486年に建立された。最古の書院造になる。東求堂の名は、相国寺住持・横川景三の撰による。「東方の人、念仏して西方に生ずるを求む」(『六祖壇経』慧能)に因む。義政の西方極楽浄土の願いが込められている。

◆同仁斎 東山文化の舞台になった「同仁斎(どうじんさい) (国宝)は、中唐の韓愈『原人』の一節、「聖人視而同仁斎」(聖人は人によって区別することがなく、平等に仁愛を施すの意)から名づけられた。

現存する最古の書院造になる。義政は、この室で、書斎、文物の飾り座敷として使い、名画名物の観賞、同朋衆により東山御物の選考などをさせていた。

解体修理により、天井から「ゐろりの間」の墨書が見つかり、この部屋で点茶が行われていたとみられている。

◆観音殿(銀閣)「観音殿(銀閣)」は、室町時代、1489年に上棟された。江戸時代中期より「銀閣」と呼ばれたという。(『山州名跡志』)。西芳寺の瑠璃殿に倣った。また金閣の二層・三層を参考にしたともいう。義政が晩年に建てた東山山荘であり、死後に菩提を弔うための寺とした。

金銅製の鳳凰が棟飾になっている。東を向き、観音菩薩を守護する。なお、銀箔は一度も施されなかった。下層は「心空殿(しんくうでん)」と呼ばれ、東を正面とする。六畳仏間の拭き板敷、吹寄格天井。北に六畳間があり、北西に階段がある。東側正面にのみ吹放しの縁、広縁があり、引違の腰高障子、杉戸、書院造。

上層が「聴音閣(ちょうおんかく)」と呼ばれ、16畳板敷の禅式仏殿(禅宗式仏間)であり、南を正面としている。部屋の西中央に須弥壇に観音像を安置する。創建時には、軒周りに帯状模様、花柄の極彩色などが施されていた

◆庭園 庭園は、北、東、南の三方を山に囲まれている。上下二段に大別され、上段は枯山水庭園の漱蘇亭(そうせんてい)跡の庭園、下段は錦鏡池(きんきょうち)を中心にした池泉回遊式庭園になっており、庭園の発祥になったという。四方面の庭ともいわれ、どの角度からも観賞もできる。庭園には、義政の浄土信仰、蓬莱神仙思想が表現されているという。

義政が好んだ西芳寺(苔寺)を手本に作庭された。義政は、西芳寺に20回近く遊覧した。当初、西芳寺は女人禁制になっており、義政の母に庭を見せることができなかった。義政は銀閣寺を造営して果たしたともいう。また、天龍寺庭園も参照したともいう。

◆中央に錦鏡池(きんきょうち)が配置されている。池泉は東西2つあり、西に「仙人洲」、東に「白鶴島(はっかくとう)」が造られ、それぞれ「迎仙橋」、「仙桂橋(せんけいきょう)(東)」・「仙袖橋(せんしゅうきょう)(西)」が架けられている。この付近の石組が最も古い。

白鶴島は、北の東求堂側から観ると、中央に「三尊石」に組まれている。さらに、石組は鶴の頭部に当たり、東西に架かる2つの青石の石橋は、鶴の両翼を表すという。小さな前石が2個ある。また、反対の南側の臥雲橋側からは、中島は首をたたみ、翼を休めた鶴の姿になるという。この場合には、白鶴島の右端、仙桂石の傍に立った石が鶴首石、中央の平石が羽石、島の左端に尾がある。当初は池に蓮が植えられていた。

大内石を寄進した大内政弘(1446-1495)は、大内氏第14代当主であり、義政に献上した。

庭は東山から昇る月の観月が意識されている。正面の山は義政により、「月待山(つきまちやま)」と名づけられた。

江戸時代初期、1615年に宮城丹波守豊盛、引き続き、1639年にその孫・豊嗣は建物も庭園も大幅に改修した。この時、月を意識した現在の白川砂の「銀沙灘(ぎんさだん)」、「向月台(こうげつだい)」、「仙草壇」、「銀閣寺垣」が造られた。白川砂(花崗岩質砂)は、白く輝き反射率が高い。銀沙灘は月光を反射させた。

◆銀沙灘

銀沙灘は、高さ35-40cmあり、砂紋は波(中国・西湖の波紋)を表す。

向月台(盛砂)は、底部直径320cm/300cm、頂上部直径1.2m、高さ180cm/165cm/155cm、頂部120cm、傾斜角55度ある。

◆向月台

向月台付近に、かつて東求堂が建てられていたという。

向月台は、銀閣の上からの眺めを考慮して造られたという。また、中国西湖の風景を模して、向月台の上に坐して月が昇るのを待った。

なお、借景としての月待山と、銀沙灘・向月台の描く曲線とは呼応する。これら砂の造型は、江戸時代後期に成立した。当時は、池泉が白い流砂により埋められ、これらの砂を掻き出して造られたともいう。

現在、使用されている砂の総量は10tともいわれている。

向月台の手入れは月に1、2回程度行われている。作業は4人で行い、まず表面の砂を2cmほど削る。白川水と砂を混ぜたものをコテで塗り、叩いて固めていく。

◆手水鉢

方丈から持仏堂に至る廊下の途中に、「銀閣寺形手水鉢(袈裟型手水鉢)」がある。江戸時代作。自然石の上に碗形で持ち上げている。上面の水溜は円、側面は方形で網目意匠(市松模様)は4面それぞれが異なる。創建当初から据えられており、千利休(1522-1591)も写しを造ったという。花崗岩製、高さは81cm。

◆東山水上行

本堂(方丈)に「東山水上行」の扁額が掛かる。「東山(とうざん)水上(すいじょう)に行く」(『雲門広録』)に因む。

一人の修行僧が、仏の悟りの境地とは何かと、中国の禅僧・雲門文偃(うんもん ぶんえん、864-948)に問う。禅師は「東山水上に行く」と答えた。東山とは湖北省にある馮茂山の別名をいう。山は泰然として動かない象徴になる。その山が動き、川の水面を流れ行くとは、人の常識や分別を超えたところにこそ、真の悟りの境地はあると論じたという。

◆送り火

「大文字の送り火」の起源については諸説ある。

足利義政の後継者の義尚(よしひさ、1465-1489)は、24歳で急逝した。新盆に義政は、その菩提を弔うために、家臣・芳賀掃部(ほうが かもん)に命じたともいう。

禅僧・横川景三は、東求堂から如意ヶ岳の山面を望み、「大」の字形を定め白布により模った。その場所に火床を掘り、お盆の16日に松割木に点火し、義尚の精霊を送ったともいう。

1490年、義政は亡くなる。義政は一度だけ送り火で追善したことになる。

◆映画

現代劇映画「暗夜行路」(監督・豊田四郎、1959年、東宝)の撮影が行われた。時代劇映画「パッチギ！」(監督・井筒和幸、2004年、シネカノンなど)では、参道が高校生同士の乱闘シーンになった。

◆足利義政に関する歴史事項

応仁の乱。足利幕府の世継ぎ争いの戦で京都は全域焼け野原。市内で唯一残っていたのは千本釈迦堂のみ。

日野富子(日本三大悪女、北条政子、淀殿)。木材販売の全権、金貸しの全権を掌握。財をなした。

日本芸術、東山文化の開花。

■伏見稲荷大社

東山連峰南端、神奈備山である稲荷山(標高 233m)の山自体が古くより神体山として信仰されてきた。

稲荷山の三ヶ峰(みつがみね、一ノ峰、二ノ峰、三ノ峰)の山麓に、伏見稲荷大社(ふしみ いなり たいしゃ)はある。「お稲荷さん」ともいわれ親しまれ、穀霊神の庶民信仰の社として知られている。

「稲荷本宮」「惣本宮」「藤森稲荷」とも呼ばれた。境内総面積は、27 万坪(892561㎡)にも及ぶ。全国にある 4-33 万社ともいわれる稲荷神社の総本宮になる。境内の摂社・末社も数多い。

現在の主祭神は宇莫迦之御魂大神(うかのみたまのおおかみ、中央座・下社)、佐田彦大神(さだひこのおおかみ、北座・中社)、大宮能売大神(おおみやのめのおおかみ、南座・上社)の 3 社に、

下社の摂社・田の神であり、かつて荒神峰に祀られていた田中大神(たなかのおおかみ、田中社、最北座・下社摂社)、四大神(しのおおかみ/しだいじん、最南座・中社の摂社)が加わり 5 座になった。これらを稲荷大神(稲荷五社大明神、稲荷五所)と総称している。

古墳時代、4 世紀(301-400)後半、稲荷山の三ヶ峰それぞれに、3 基の大型円墳群が造営された。首長墓級の古墳とされる。稲荷山全山は、古くより神奈備(かなび)山として信仰された。また、三峰にそれぞれ上社、中社、下社が祀られていたともいう。5 世紀(401-500)前後、この地に秦氏が進出したという。それ以前には、紀氏、賀茂氏が管轄していたともいう。

奈良時代、和銅年間(708-715)、当社が創建されたとともいう。711 年、如月初午(はつうま)の日、稲荷大神(いなりのおおかみ)が、稲荷山(伊奈利山)の三嶺の平らな所に示現したとの伝承があり創祀となったという。

秦公伊侶具(はたのきみ いろぐ)の「餅的」の記述がある。以来、秦氏一族は禰宜(ねぎ)、祝(ほふり)となり祭祀奉仕を行う。一ノ峰に大宮能売大神、二ノ峰に佐田彦大神、三ノ峰に宇莫迦之御魂大神を祀ったという。

平安時代以来、2 月の初午に当社に参詣する習わしがあった。826 年、空海は東寺建造の用材として稲荷山の神木を伐り出した。このため、神の祟りにより第 53 代・淳和天皇が「不与」となる。

827 年、空海が第 52 代・嵯峨天皇により東寺を下賜された際に、稲荷社は東寺の鎮守社になった。以後、天皇、貴族の「福詣り」も盛んに行われた。

◆お御籤

当社は創祀以来、福の神として信仰されてきたため、お御籤に「凶」はない。「大大吉」「向(むこう)大吉」「凶後大吉」などが出る。

◆秦伊侶具

奈良時代の秦伊侶具(生没年不詳、はたの いろぐ)。詳細不明。伊呂巨(いろこ)?。秦中家忌寸(はた の なかつや の いみき)らの祖先。伊侶具は稲を積み上げるほど富裕だった。奢り、餅を的にして矢を射り、餅は白鳥になり飛び去り、山の峰で稲になったため、伏見稲荷大社を「伊奈利(稲成り)社」と名づけたという。

◆秦大津父

6世紀の官吏・秦大津父(生没年不詳、はたの おおつち)。詳細不明。山背の人。有力氏族。商人。馬による交易を行う。第29代・欽明天皇の幼少期、ある人に夢告あり、大津父を寵愛すれば、天皇の壮年に天下を治められるとされ、540年、大津父は大蔵の官吏に任命されたという。

◆秦氏・伊呂具

農耕、豊饒の神の稲荷神は、渡来系古代豪族秦氏により奉祀された神になる。秦氏は機織、養蚕、金工、土木の生産技術に長け、水稻農耕を担い、中央の大蔵分野にも進出し、財政面で支援した。天皇家とも密接な関係を保った。秦氏の勢力拡大とともに稲荷神の神威も増大した。

秦氏は5世紀前半に新羅より渡来してきたという。紀伊郡深草の地には5世紀後半に移住した。

秦氏の長・伊呂具は、大量の稲を収穫し富裕となる。説話が残る。奈良時代、711年、秦公が餅を的に見立て弓を射た。餅は白鳥と化し山上に飛び去り、降りたところ稲が生じた。この「伊禰奈利(いねなり、稲生)生いた」「稲成り生いた」から、「伊奈利(いなり)」「稲荷」になったという。

その後、凶作が続く、秦氏の家運傾いたため、伊呂具は三柱を稲荷山三ヶ峰に祀り、社の起源になったという。餅とは稲魂、穀霊の象徴になる。これらの伝承は、穀物信仰の現れであり、伊奈利(稲荷)社の祭祀が、秦氏によって行われていたことを示している。

「いなり」は「鳴(いな、いばる)」であり、「大きく鳴る」の意味として稲荷山に雨を招く雷神を意味するともいう。

◆荷田氏

稲荷社は旧社家の秦氏とともに荷田氏により神職が継承されてきた。荷田氏は、カモ氏の支流とされる。荷田氏は秦氏に比して深草の土着氏族という。奥宮(上御殿)脇に秦氏の祖神を祀る長者社とその左隣に荷田氏の祖神を祀る荷田社がある。これは、カモ氏と秦氏の関係を表し、秦氏より先住氏族・荷田氏は賀茂別雷神を祀っていたともいう。荷田氏には、東羽倉、西羽倉、それぞれの分家がある。伏見稲荷大社の外拝殿南にある東丸(あずま丸)神社は、江戸時代の国学者・荷田春満(かだの あずま丸)を祀る。

◆お塚信仰

稲荷山(標高233m)は古来より、山全体が神降る、神祀る神南備山(かむなびやま/かんなびやま)として信仰の対象になっている。磐境(いわさか)とされてきた。山には18の峰、20(30とも)あまりの谷があるという。一ノ峰から三ノ峰を巡回する「お山めぐり(お塚参り)」が知られ、総延長は4kmになる。

◆お山めぐり

お山めぐりは、「お山する」と呼ばれる。

本殿より、玉山稲荷社、奥宮、千本鳥居を抜け、奥社奉拝所(おもかる石)、根上がりの松(膝松、奇妙大明神)がある。

「奇妙大明神(膝松大明神)」は、「根上がり松」、「ひざ松」とも呼ばれている。松の老木があり、かつては根の部分が浮き上がり、下を潜ることができた。根の下をくぐると肩こり、膝、腰の病平癒するという。松の根を手で撫で、体の痛む部分を摩ると神経痛の痛み、肩のこりが治るとされた。「値上がり」の連想により株、給与上昇の信仰も集めた。

奥社奉拝所のおもかる石、願い事を念じ、石燈籠の空輪の部分を持ち上げる。自分の予想より重く感じると願い事はかなうという。軽く感じると成就しないという。

◆狐

境内の狛狐は神使(しんし)であり、口に宝珠(玉)、鍵、巻物(経文)などを咥えている。宝珠は、稲荷大神が秘める神徳、穀霊を意味する。鍵は、稲荷大神の宝蔵、米倉を開く秘鍵を意味している。狐にまつわるさまざまな話が残る。

稲荷神と関わりの深い狐は、かつて稲荷山に多く生息していたという。神使の狐との関連は、俗信として食物神の「御食津神(御気津神、みけつのかみ)」から「御狐(みけつ)」、「三狐(みけつ)」へと転訛したともいう。

中国では「狼」を「狐」と書いた。540年頃、秦大津父(おおつち)は、商用で出掛けた伊勢の帰りに、稲荷山の大亀谷(狼谷)で、争う二匹の狼(狐とも)を仲直りさせた。その功により、大津父は、欽明天皇の側近に登用され富を成したとの伝承がある。

渡来系の秦氏により、大陸の狼(山犬)への霊性信仰が日本にも伝わった。狼の絶滅後は、稲の害虫である鼠を捕食する狐がこれに代わったともいう。

稲荷神は東寺の鎮守社であり、本地仏の女神・荼吉尼天(だきにてん、荼枳尼天)が狐を眷属としていることから生まれたともいう。荼吉尼天(ダーキニー)はジャッカル(野天、やかん)に乗り、人の願いをかなえる神とされた。やがて、稲荷神と混同され、ジャッカル(野天)の代わりに狐が神使になったともいう。荼吉尼天は、剣と宝珠を持ち白狐に乗る。(ダキニ天は金閣寺にもある。)

◆千本鳥居・鳥居

千本鳥居なども含め、稲荷山全体に10,000基以上の鳥居が奉納されている。願い事が通る、通ったという願掛けの御礼により、江戸時代、化政年間(1804-1829)以降に始まり、本格的には近代以降(18世紀中期)に盛んになったという。

鳥居に見られる朱塗りは「稲荷塗(稲荷朱)」といわれる。由来については諸説ある。稲荷神が赤い楓を好んだことによるもの。赤土の持つ生命力を表している。破邪の呪力を示すもの。鉛丹(光明丹、赤色酸化鉛)には防虫効果があるためともいう。伏見稲荷大社の朱塗り鳥居について、近代以降の傾向とされる。それ以前には、黒木鳥居しか存在しなかったという。

◆名物

「伏見人形」は、安土・桃山時代、また、江戸時代、元和年間(1615-1623)に作られるようになり、全国の土人形の元になったという。かつて、深草瓦師が稲荷山の土により、大根、人参などの焼き物を作り、畑に入れて豊作を祈願した。

土型に粘土(埴土)を詰め、乾燥させて焼き、胡粉、岩絵具で彩色した。「深草人形」、「稲荷人形」ともいわれた。初午に布袋の人形を買い求めて神棚に飾り、翌年は少し大きいものを買求め、7年をかけて七福神とした。その間に不幸があると、すべて川に捨て、再び買い足さなければならなかったという。最盛期には60軒ほどの窯元があった。現在は、「丹嘉」(東山区本町)一軒のみが残る。

参道脇には稲荷鮓、きつねうどんが売られている。狐は稲荷の使いであり、狛の狐に好物の油揚げを御供し、そのお下がりの料理として生まれたともいう。具材の油揚げと狐の毛色が似ていることからの連想ともいう。

「雀の焼き鳥」、「鶉の焼き鳥」は、伏見稲荷が農耕神、五穀豊穡の神であり、その大切な米を食う雀退治のために、雀の焼き鳥が生まれたという。鶉は、平安時代中期まで栄えた伏見、深草界隈も、1156年の保元の乱以後に荒廃し草地と化した。そのため野鳥の生息地になり、雀に代わり鶉焼きになった。近年、いずれも原材料入手困難により店は減っている。

「いなりや」(境内)のいなり煎餅は、小麦粉に白みそ、炒りごまを合わせた生地を薄く焼いた。狐面の形のほか、丸形、お多福、辻占煎餅などがある。

◆映画

現代劇映画「スクール・ウォーズ/HERO

(監督・関本郁夫、2004 年、松竹)では境内で撮影が行われた。山上修治(照英)、和田道代(SAYAKA)らが登場し、ラグビー部員らが石段を駆け上がる。

アメリカ映画「SAYURI (Memoirs of a Geisha)」(監督・ロブ・マーシャル、2005 年、SPE、ブエナビスタ/松竹)の撮影が行われた。置屋に売られた千代(少女時代のさゆり、大後寿々花)が千本鳥居を駆ける。

◆神仏習合

『弘法大師行状絵詞』中、「稻荷来影」の段に、稲を背負った老翁(稻荷神)が空海と再会する逸話がある。空海は筑紫で、稲を担った老翁に出会う。老翁は京都の柴守長者(しばもり ちょうじゃ)といい、仏法守護するという。

また、816 年、紀州田辺で行をしていた空海は、仏法隆盛に協力するという老翁(稻荷神)に出会う。その後、823 年、身の丈八尺(2.4m)の白髪のお翁は、二人の女と二人の子を連れ、東寺の空海を訪ねる。南大門で翁は、稲を荷い杉の葉を持っていたという。

空海は柴守長者の家(八条二階堂)に一行を泊める。空海は、東南の東山、東寺の仙山で7日間の鎮壇の修法を行い、老翁(稻荷神)に鎮座させた。老翁の「稻荷い」に因み、「稻荷明神」と称したという。

また、和銅年間(708-715)、龍頭太(りゅうとうた)という龍顔で光を放つ翁が稻荷山麓に棲んでいた。昼は耕し、夜は薪を伐採した。姓は荷田(かだ)といい、やはり稲を荷った。

仏法守護するというこの山神の面を彫り、ご神体として稻荷明神の竈殿に祀ったものという。また、弘仁年間(810-823)、空海と約束し稻荷山を守護したという。龍頭太は、竜神、雷神とみられ荷田氏の祖とされている。

826 年、東寺の五重塔建築のために、巨木の材 24 本(塔心材 4 本、幢材 4 本、幢柱 16 本)は、神域の稻荷山から伐り出された。2490 人がこの作業に関わる。

この時、ご神木を伐採した祟りとして、淳和天皇が病いになったとされた。朝廷は稻荷社に従五位下の神階を授け、これを謝罪したという。

空海の弟子・実恵(じちえ)が、東寺南大門で、稲を背負う老夫婦に出会う。老夫婦は多数の供を率いていた。実恵が空海に伝えると、空海は中門に引き入れた。

老夫婦は、比叡山の最澄に招かれたという。空海は、比叡山は日吉神が鎮守しているので、東寺を守護してほしいと頼んだ。老夫婦は承諾し、境内に稻荷神が祀られた。

当社の稲荷祭・還幸祭(5月3日)では、空海が東寺を訪れた老翁(稻荷神)をもてなした伝承に由来する儀式が続く。東寺近くの伏見稻荷大社御旅所(八条二階堂屋敷旧跡)へ、5基の神輿が還御する。途中、神輿は東寺・東門に立ち寄り、東寺僧侶による神饌献供を受ける。これが、空海が稻荷神を饗応した伝承に因むものという。

■ 清水寺界限

● 清水寺

東山三十六峰・音羽山の西の中腹にある清水寺。

北法相宗の大本山。山号は音羽山、開山の頃は「北観音寺」と称される。

780年、この地に鹿狩りに来た坂上田村麻呂が修行中の僧、延鎮に殺生を戒められ、夫人とともに千手観音を造りお堂を建てたのが始まりと伝える。

【拝観料】高校生以上 400 円、中学生以下 200 円

● 清水道

東大路通の清水道交差点から清水寺までの約 1.2 キロの坂道は清水道と呼ばれ、道の両側には観光客向けのみやげ物店などが多く並ぶ。

● 松原通

松並木の綺麗な通から「五条松原通」と言われるようになり、後に「松原通」の名前だけが残った。豊臣秀吉が五条の橋を現在の地に架けたことから二筋南に五条通の名前が移った。つまり、牛若丸と弁慶が出会ったと言われる「五条の橋」は、松原通に架かる橋が正当であり、現在五条大橋西詰におかれている 2 人の像は二筋南におかれていることになる。なお現在の松原橋は 1935 年の鴨川水害で倒壊流失後に架け替えられたものである。

● 産寧坂

「産寧坂」の語源には諸説あり、この坂の上の清水寺にある子安観音へ「お産が寧か(やすらか)でありますように」と祈願するために登る坂であることから「産寧坂」と呼ばれるようになったという説が有力だが、一方で清水寺に参拝した人がこの坂道を通る際に念願を強くし、願いが叶ったあとで観音様への御礼に再度お参りする時に通る坂であることから「再念坂」と呼ぶようになったという説もある。

同名異字の「三年坂」で転ぶと、三年以内に死ぬ。また転べば三年の寿命が縮まると伝記が三年坂通りのある和歌山市で有名であるが、直接関係あるのかは不明。

● 茶わん坂

実はごく最近(1922 年(大正 11 年))付けられた名前。

大正時代以前までは、「清水新道一丁目」などと呼ばれていた。

「清水坂」のあたりは「窯元(かまもと/陶磁器を作る工房)」が軒を連ねていて、

1629 年、清水寺の境内は大火事で焼失、客足が一旦、途絶えるが、その後徳川家光公によって 1633 年頃(慶長年間/江戸時代)から再建が開始される。

再建後の清水寺は以前にも増して賑わいをみせ、この賑わいに乗じて店の数も増加。

自らが陶磁器を焼いて販売する者も出沒し、陶磁器販売で豪商になる人物も出てきた→茶碗屋久兵衛後に久兵衛の茶碗や陶磁器は参拝客の間で人気となり、この久兵衛の名前の「茶碗屋」から「茶碗」をとって「茶碗坂」というネーミングが付されている。

● 仁王門(重文)

応仁の乱によって焼失しているが、15世紀末には再建された。室町時代の特徴をよく示した楼門で、丹塗りのため「赤門」とも呼ばれている。

正面に掲げられている「清水寺」の額は、藤原行成の筆と伝えられている。

門の両脇には、鎌倉時代末期の金剛力士(仁王)像を安置。像高365cmで、京都では最大級の仁王像。仁王門の右側端っこに指でくりぬいたような穴が開いていて、これが表側と、門をくぐり抜けた裏側にある。これは片方に耳をあて、もう片方を誰かが叩くと「カンカン」と透き通った音が聞こえてくる。なぜこれが作られたのか、なぜこんな澄んだ音色が聞こえるのかは謎。(七不思議・その1)



● 鐘楼(重文)

現在使われている梵鐘は、2008年(平成20年)に取り付けられた5代目で梵鐘の重量は約2トン。

4代目の梵鐘は応仁の乱後の1478年(文明10年/室町時代)に復興の意味合いを込めて「時宗の僧侶・願阿上人(がんあしょうにん)」の発願によって奉納されたもので、鐘楼と並んで重要文化財に指定されている(現在は非公開。境内の「宝蔵殿(ほうぞうでん)」に安置。)

鐘の金属劣化の話はあまり聞きませんが、鐘は劣化すると残響時間が短くなります。

4代目の梵鐘は1分持たず45秒ほどだったようです。

現在の5代目の梵鐘は厚みを不均等にして鑄造することで、約2分間も残響が出るに設計されています。余談ですが、この5代目の梵鐘の設計と鑄造は、京都市右京区にある「岩澤の梵鐘株式会社」という会社になります。鐘楼は普通4本の丸柱で支えるのですが、ここは**六本柱**になっています(七不思議・その2)謎解きをしてしまえば、この梵鐘が通常よりも大きく重たいため、それを支えるのに柱を増やしたのだとか。



● 隋求堂

清水寺の境内にかつて存在した「慈心院」の本堂(伽藍・がらん・塔頭)

安産の神様:「粟島明神(あわしまみょうじん)」

縁結び・金運向上の仏様「大聖歓喜天(だいしょうかんきてん)」(秘仏)

このお堂では、「胎内くぐり」と言って、真っ暗なお堂の地下へ入ることができる

この地下には、菩薩を意味すると言われる「梵字(ハラ)」が刻まれており、暗闇の中、この字に触ることができれば、願いが1つだけ叶うと言われている。

「胎内くぐり」の料金:100円 「胎内くぐり」ができる時間:9:00~16:00

● 狛犬(七不思議・その3)

狛犬というのは通常「阿吽」すなわち「阿形(あぎょう)」と、口を閉じた「吽形(うんぎょう)」で一對を成すもの。ところが、ここはどちらも「阿」「阿」と口を開けている。

実は、奈良東大寺の南大門北側の狛犬も「阿阿」型。「阿吽」でなければいけないという決まりはないんだそう。「阿」は宇宙や万物の始まり、「吽」は宇宙や万物の終わりという意味。五十音でも「あ」で始まり「ん」で終わりますね。これもその意味。「阿吽」で完結するわけです。すべての始まりを意味する「阿」の狛犬が二匹並んでいると、まるで「ここから何かが始まりますよ」という、壮大な入り口を連想させる。

● 三重塔(重文)

仁王門のすぐ近くにある三重塔

この塔が建立されたのは847年(承和14年/平安時代)と伝えられており、時の天皇である嵯峨天皇の皇太子が生まれたことにより、葛井(かどい)親王が勅命を奉じて創建されたと伝えられている。

何度か焼失を繰り返し、現在まで伝えられているのは1632年に再建されたものを、1987年に解体修理して復元されたもの。

この塔の注目すべき隠れた見どころは「屋根の鬼瓦」。

四隅にある鬼瓦のうち、南東の鬼瓦だけは、なぜか龍神の鬼瓦(七不思議・その4) ★

● 虎の石灯籠(七不思議・その5) ★

仁王門の手前の右奥、西門下の広場には「虎の図」の石灯籠がある。

江戸時代後期の虎の絵の名手「岸駒」の作品。

この虎は、毎夜灯籠から抜け出して、池の水を飲みに行くという。

ちなみに、八方睨みの虎といわれ、どの方向から見ても目が合う。

● 清水の舞台(国宝)(七不思議・その6) ★

現在の建物は徳川家光の寄進により1633年(寛永10年)に再建されたもの

「懸造」(かけづくり・舞台造ともいう。)と呼ばれる建築方法で釘は一本も使用されていない。樹齢400年のケヤキの大木を使って作られ、一度組んだら決して外れず、この手法を「地獄組み」と言うそうです。舞台に釘などの金属が使われなかったのも、錆による腐食を防ぐためなのだからか。

● 地主神社

現在の社殿は、徳川家光が寛永10年(1633年)に造営したもの。

大国主命を主祭神として、父母神の素戔鳴命・奇稻田姫命、奇稻田姫命の父母神の足摩乳命・手摩乳命を正殿に、大田大神(芸能と長寿の神)、乙羽竜神(旅行・交通安全の神)、思兼大神(知恵と才能の神)を相殿に祀る。

「恋占いの石」や「恋みくじ」で修学旅行生に大変人気のスポットの1つ。

● 音羽の滝

「清水寺」の名前は、この滝からこんこんと流れ出る清水が由来。本来はここで滝行を行う場所。

水の中の3組の踏み台がある。早朝に滝行を行っている人がいる。

三筋の滝から構成されており、そのご利益は、向かって右から、「延命長寿」「恋愛成就」「学業成就」の順とされている。(これはバスガイドが広めた。現在はもう言っていない。)常に行列が出来ているので、よっぽど時間が余ってるときしか並べません。「写真だけね!」でうまく回避!

● 舌切茶屋

清水寺参拝の後には忠僕茶屋と舌切茶屋という2軒の茶店があります。

舌切茶屋は月照を守り、安政の大獄で捕えられた近藤正愼が獄中で壁に頭を打ちつけて舌を噛み切って自害したことにより、その妻子が境内で茶屋を営業することを許された。

近藤の子孫は代々、清水寺境内で休憩所「舌切茶屋」を営む。(孫に陶磁器の人間国宝である近藤悠三、曾孫に俳優の近藤正臣がいる)舌切りすずめとは無関係！

● 忠僕茶屋

月照上人の九州下向に付き従い、忠実に仕えた者がいました。まだ20代の若者、大槻重助(おおつきじゅうすけ)です。月照上人の入水後、その遺品を京都に持ち帰った重助は、京都に戻った後、捕えられ、六角牢獄につながれます。そこで同じく獄中にあった信海上人と再会。信海上人は後に江戸に送られ、伝馬町牢内で病死するのですが、このとき重助は、信海から後事を託されたのです。

重助はやがて解放され、一旦は生まれ故郷に帰ったものの、再び清水寺に戻り、茶屋を営みながら、生涯、月照・信海両上人のお墓を守り続けました。

● アテルイ・モレの碑

蝦夷(えみし)の首長阿弭流為(アテルイ)と母禮(モレ)の名が刻まれた石碑。

二人は、征夷大將軍坂上田村麻呂と勇敢に戦うが、郷土の犠牲に心を痛み、田村麻呂の軍門に下った(801年(延暦20年))。

田村麻呂は、朝廷に二人の助命を願ったが、翌年、処刑されたという。

石碑は、平安建都1200年を期して、1994年(平成6年)に有志により建立されたもの。

「北天の雄 阿弭流爲 母禮之碑」と刻まれている。

● 子安の塔(重文)

正式には清水寺の塔頭(小院)である泰産寺(たいざんじ)に属する塔婆

はもともと仁王門の左手前に造営されていましたが、1911年(明治44年)に現在の場所へ移築。移築された理由としては、清水寺が子安塔を売り払い、境内の「地主神社」を現在の子安塔が建つ場所へ造営する計画があったため。

檀家を持たない清水寺の資金は寺領の収入のみだった。明治時代に差し掛かり、この寺領が減らされたため資金調達が難しくなり、境内の堂舎をやむなく売り払った歴史がある。現在見ることのできる姿は1500年(明応9年/室町時代)に再建された時のもので、外観は2013年(平成25年)に修復された時のもの。

【清水付近の寺社】

● 法観寺【八坂の塔】(重文)

臨済宗建仁寺派の寺院。山号は靈応山。聖徳太子が五重塔を建てその中に仏舎利を収めて法観寺と号したと言われている。

観光客から人気なのはやはり東大路から東へ坂道を上る風景、なんとも表現できない程、素敵な情景で、京都にいるんだな、と実感できる場所。毎年3月には東山花灯路が開催。

文化財に指定されている塔としては日本で唯一一年中内部を拝観できる塔となっていて、二層目までのぼることができます。不定休なので行っても中に入れない場合があります。内部拝観希望の班に当たったら電話確認必須！

【拝観時間】10:00～16:00【拝観料】中学生以上 400 円？(小学生以下拝観不可)

● 高台寺

臨済宗建仁寺派の寺院。山号は鷲峰山(じゅぶさん)、寺号は詳しくは高台寿聖禪寺と称する。北政所(高台院)が秀吉の冥福を祈るため建立した寺院であり、寺号は北政所の落飾(仏門に入る)後の院号である高台院にちなむ。

開山堂(重文)

もとの持仏堂で、方丈の北東にある。外陣に秀吉が使用した御座船と、内陣中央に北政所が使っていた御所車の遺材を用いたとされる天井がある。

霊屋(重文)

開山堂の東方、一段高くなった敷地に建つ、宝形造檜皮葺きの堂。慶長 10 年(1605 年)の建築。内部は中央の厨子(平素、扉を閉じている)に大随求菩薩(だいずいぐぼさつ)像を安置。向かって右の厨子には豊臣秀吉の坐像、左の厨子には正室・北政所の片膝立の木像がそれぞれ安置されている。

臥龍廊(がりょうろう)

開山堂と霊屋(おたまや)を結ぶ屋根付きの階段、龍の背に似ているところからこの名が付けられた。

庭園(史跡・名勝)

小堀遠州作とされ、しだれ桜と萩の名所。石組みの見事さは桃山時代を代表する庭園として知られる。

傘亭(重文)

境内東奥の小高い場所に位置する。伏見城から移築したものとされ、千利休好みの茶室と伝える(ただし伏見城建設は利休の自刃後)。宝形造茅葺きの素朴な建物で、内部の天井が竹で組まれ、その形が唐傘に似ているところから傘亭の名がある

時雨亭(重文)

傘亭の南隣にあり、傘亭との間は屋根付きの土間廊下でつながれている。珍しい 2 階建ての茶室で、2 階南側の上段の間は柱間に壁や建具を設けない吹き放し

【拝観時間】9:00～17:00

【拝観料】中高生 250 円、大学生以上 600 円

【駐車場】自家用車 100 台分有。最初の 1 時間 600 円。以後 30 分 300 円(参拝者 1 時間無料)清水寺は修学旅行シーズンは朝のラッシュで駐車場が満車になるので、3 年坂で買い予定に入っている班の場合、初めから高台寺に停める方法も吉。

■ 清水寺の七不思議のまとめ

- 仁王門（重文）。（その１）
- 鐘楼（重文）六本柱。（その２）
- 狛犬（その３）
- 三重塔（重文）龍神の鬼瓦（その４）
- 虎の石灯籠（その５）
- 清水の舞台（国宝）（その６）

さて、七つめは？

■ 清水寺は西国三十カ所観音霊場である。

さて、何番札所か？

■ 数年前まで京都に唯一の有料トイレがありました。

どこですか？

■ 防災道路入り口はどこですか？

どうやって入りますか？

■ 隋求道は一体何を表していますか？

■ 次回の秘仏開帳はいつでしょうか？

清水寺の奥の院ご本尊の場合、しばらくないかもしれませんが、

- ・ 2002 年に重要文化財に指定される。
- ・ 2003 年 3/7～12/7 には 243 年のときを経てご開帳。
- ・ 2008 年 8 月～11 月には博物館にて特別展西国三十三所に公開された。

■ 天龍寺

天龍寺公式ホームページ:<http://www.tenryuji.com/>

天龍寺(てんりゅうじ)は、京都府京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町(すすきのばばちょう)にある、臨済宗天龍寺派大本山の寺院。山号は靈龜山(れいぎざん)。

寺号は正しくは靈龜山天龍資聖禪寺(れいぎざんてんりゅうしせいぜんじ)と称する。本尊は釈迦如来、開基(創立者)は足利尊氏、開山(初代住職)は夢窓疎石である。

足利將軍家と後醍醐天皇ゆかりの禪寺として京都五山の第一位とされてきた。

京都五山の寺格

南禅寺 - 別格

天龍寺 - 第一位※

相国寺 - 第二位※

建仁寺 - 第三位

東福寺 - 第四位

万寿寺 - 第五位

※…なお、足利義満の意向により、応永 8 年(1401 年)3 月 5 日に相国寺を第一位、天龍寺を第二位とする順位変更が行われたが、義満没後の応永 17 年(1410 年)2 月 28 日に元に戻された。

今日では京都五山＝京都の禪寺の格付と一般に勘違いされやすいが、それは決して正しい解釈ではない。

京都五山はあくまで足利氏の政治、政略的な格付けであり、大徳寺は同様の理由から格を下げられ、後に五山制度から脱却している(詳しくは大徳寺の項目を参照)。また、妙心寺は大内義弘に肩入れしたことが原因で義満の怒りを買ひ、寺領すらも没収されていた。再興を果たすのは江戸時代からである。

天龍寺の地には平安時代初期、嵯峨天皇の皇后橘嘉智子が開いた檀林寺があった。その後約 4 世紀を経て荒廃していた檀林寺の地に後嵯峨天皇(在位 1242 年 - 1246 年)とその皇子である龜山天皇(在位 1259 年 - 1274 年)は離宮を営み、「龜山殿」と称した。「龜山」とは、天龍寺の西方にあり紅葉の名所として知られた小倉山のことで、山の姿が亀の甲に似ていることから、この名がある。天龍寺の山号「靈龜山」もこれにちなむ。

足利尊氏が後醍醐天皇の菩提を弔うため、大覚寺統(龜山天皇の系統)の離宮であった龜山殿を寺に改めたのが天龍寺である。

尊氏は暦応元年/延元 3 年(1338 年)、征夷大將軍となった。後醍醐天皇が吉野で崩御したのは、その翌年の暦応 2 年/延元 4 年(1339 年)である。足利尊氏は、後醍醐天皇の始めた建武の新政に反発して天皇に反旗をひるがえした人物であり、対する天皇は尊氏追討の命を出している。いわば「かたき」である後醍醐天皇の崩御に際して、その菩提を弔う寺院の建立を尊氏に強く勧めたのは、当時、武家からも尊崇を受けていた禅僧・夢窓疎石であった。

寺号は、当初は年号をとって「暦応資聖禪寺」と称する予定であったが、尊氏の弟・足利直義が、寺の南の大堰川(保津川)に金龍の舞う夢を見たことから「天龍資聖禪寺」と改めたという。寺の建設資金調達のため、天龍寺船という貿易船(寺社造営料唐船)が仕立てられたことは著名である。落慶供養は後醍醐天皇七回忌の康永 4 年(1345 年)に行われた。

天龍寺は京都五山の第一として栄え、寺域は約 950 万平方メートル、現在の嵐電帷子ノ辻駅あたりにまで及ぶ広大なもので、子院 150 か寺を数えたという。しかし、その後のたびたびの火災により、創建当時の建物はことごとく失われた。

中世には延文 3 年(1358 年)、貞治 6 年(1367 年)、応安 6 年(1373 年)、康暦 2 年(1380 年)、文安 4 年(1447 年)、応仁元年(1467 年)と、6 回も火災に遭っている。応仁の乱による焼失・再建後、しばらくは安泰であったが、江戸時代の文化 12 年(1815 年)にも焼失、さらに幕末の元治元年(1864 年)、禁門の変(蛤御門の変)で大打撃を受け、現存伽藍の大部分は明治時代後半以降のものである。なお、方丈の西側にある夢窓疎石作の庭園(特別名勝・史跡)にわずかに当初の面影がうかがえる。

また、2500 点余りの天龍寺文書と呼ばれる文書群を所蔵しているが、中世のものは度々の火災で原本を失ったものが多く(案文・重書案などの副本の形で残されている)、後に関係の深い臨川寺の文書が天龍寺に多数移されたこともあって、「一般に天龍寺文書といわれるが、現実には臨川寺文書が多数を占める[1]」とまで言われている。これに対して近世のものは寺の日記である「年中記録」などの貴重な文書が伝えられている。ともに、中世・近世の京都寺院の状況を知る上では貴重な史料である。方丈の北側には、宮内庁管理の亀山天皇陵と後嵯峨天皇陵がある。「古都京都の文化財」として世界遺産に登録されている。

◆庭園

特別名勝及び史跡の指定範囲は、前庭と方丈裏庭。前庭は、勅使門から放生池を経て法堂に至る境内中心部を指す。方丈裏庭は曹源池(そうげんち)を中心とした池泉回遊式庭園で、夢窓疎石の作庭。

嵐山全景を使った借景庭園。手前の山景、中間の山景、嵐山の山景の**3層の山景を使った雄大な借景庭園**。



■ 後醍醐天皇 南北朝時代

建武の新政の崩壊を受けて足利尊氏が新たに光明天皇（北朝側）を擁立したのに対抗して京都を脱出した後醍醐天皇（南朝側）が吉野行宮に遷った 1336 年（延元元年/建武 3 年）から、南朝第 4 代の後亀山天皇が北朝第 6 代の後小松天皇に譲位するかたちで両朝が合一を見た 1392 年（元中 9 年/明德 3 年）までの、56 年間をいう。また両朝の並立はひとえに後醍醐天皇の皇位に対する執念が生み出したものであることから、彼を中心に歴史が動いた南北朝時代の序章とでもいうべき 1331 年（元弘元年）の元弘の乱から建武新政の終焉に至る 5 年間もまたこの時代を含めるのが一般的である。

鎌倉時代の後半から半世紀にわたって両統迭立という不自然なかたちの皇位継承を繰り返した皇統は、すでに持明院統と大覚寺統という二つの相容れない系統に割れた状態が恒常化するという実質的な分裂を招いていた。それが倒幕と新政の失敗を経て、この時代になると両統から二人の天皇が並立し、それに伴い京都の北朝と吉野の南朝[1]の二つの朝廷が並存するという、王権の完全な分裂状態に陥った。両朝はそれぞれの正統性を主張して激突し、幾たびかの大規模な戦が起こった。

また日本の各地でも守護や国人たちがそれぞれの利害関係から北朝あるいは南朝に与して戦乱に明け暮れた。

こうした当時の世相を、奈良興福寺大乘院の第 20 代門跡・尋尊は自らが編纂した『大乘院日記目録』の中で「一天両帝南北京也」と表現した。これを中国の魏晋南北朝の時代を模して南北朝時代と呼ぶようになったのはかなり後のことである。

なお明治以後に南朝の天皇を正統とする史観が定着すると、この時代の名称が「北朝」の語を含むことが問題視されるようになったため、吉野朝時代（よしのちょうじだい）という新語が作られたが、第二次世界大戦後に皇国史観が影を潜めるとともに死語同然となった。

◆南北朝の合体

1392 年（元中 9 年/明德 3 年）、足利義満の斡旋で、大覚寺統と持明院統の両統迭立と、全国の国衙領を大覚寺統の所有とすることを条件に、南朝の後亀山天皇が北朝の後小松天皇に三種の神器を渡し、南北朝が合体した（明徳の和約）。

南北朝合一を機に、九州北部を制圧していた今川貞世は九州南部に拠る菊池武朝と和睦し、九州も幕府の支配するところとなった。

その後、足利義満が新たに冊封されて「日本国王」となる。勘合貿易の主権。

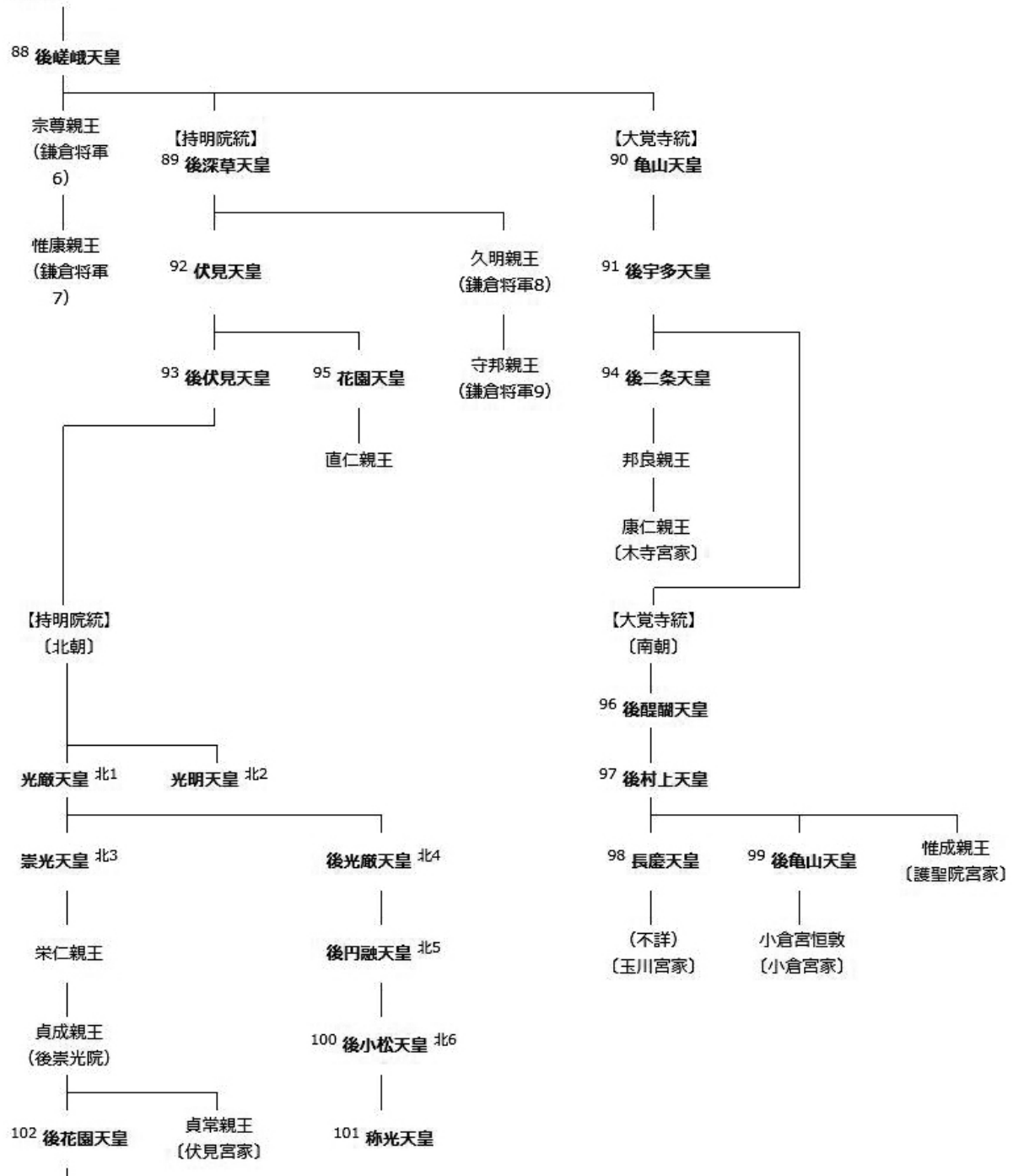
◆大覚寺統と持明院統が交互に皇位につく両統迭立

大覚寺統＝南朝＝亀山天皇。後醍醐天皇。 **持明院統**＝北朝＝後深草天皇＝足利幕府＝後小松天皇。

南北朝成立まで

鎌倉時代半ばの寛元 4 年（1246 年）、後嵯峨天皇の譲位後に皇統は皇位継承を巡って大覚寺統と持明院統に分裂した。そこで鎌倉幕府の仲介によって、大覚寺統と持明院統が交互に皇位につく事（両統迭立）が取り決められていた。

系図



■ 世界遺産

● **公式の分類** 世界遺産はその内容によって以下の3種類に判別される。

◆ **文化遺産**

顕著な普遍的価値をもつ建築物や遺跡など。

◆ **自然遺産**

顕著な普遍的価値をもつ地形や生物多様性、景観美などを備える地域など。

◆ **複合遺産**

文化と自然の両方について、顕著な普遍的価値を兼ね備えるもの。

また、内容上の分類ではないが、後世に残すことが難しくなっているか、その強い懸念が存在する場合には、該当する物件は危機にさらされている世界遺産リスト(危機遺産リスト)に加えられ、別途保存や修復のための配慮がなされることになっている[5]。なお、後述するように、無形文化遺産は世界遺産条約の対象ではない。

■ 京都の世界遺産 京都地域の文化財（京都府京都市、宇治市、滋賀県大津市）

賀茂別雷神社(上賀茂神社)
賀茂御祖神社(下鴨神社)
教王護国寺(東寺)
清水寺（現在は分離している地主神社を含む）
延暦寺
醍醐寺(塔頭寺院の三宝院を含む)
仁和寺
平等院
宇治上神社
高山寺
西芳寺(苔寺)
天龍寺
鹿苑寺(金閣寺)
慈照寺(銀閣寺)
龍安寺
西本願寺
二条城

● 非公式な分類

世界遺産には、自然遺産、文化遺産、あるいは文化遺産の中での文化的景観や産業遺産など、世界遺産センターやICOMOSによって公式に認められた分類とは別に、非公式に使われている分類もある。

平和の希求や人種差別の撤廃などを訴えていく上で重要な物件も世界遺産に登録されている。明確な定義付けがされているわけではないが、これらは別名「負の世界遺産」(負の遺産)と呼ばれている。

負の遺産としてしばしば挙げられるのは、原爆ドーム、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所、奴隷貿易の拠点であったゴレ島、ネルソン・マンデラ元大統領が幽閉されたロベン島[注釈 3]。このほか、2010年に登録されたビキニ環礁の核実験場も、登録された際には負の遺産として報じられ、世界遺産関連書でもそのように扱っているものがある。

■二条城「二条離宮跡」が正式名称

二条城は、京都市中京区二条通堀川西入二条城町にある、江戸時代に造営された日本の城である。

京都市街の中にある平城で、後述する足利氏、織田氏、豊臣氏、徳川氏によるものがあるが、現在見られるものは徳川氏によるものである。また、後の近代において二条城は京都府の府庁や皇室の離宮として使用された。

城内全体が国の史跡に指定されている他、二の丸御殿(6棟)が国宝に、22棟の建造物と二の丸御殿の障壁画計1016面が重要文化財に、二の丸御殿庭園が特別名勝に指定されている。

さらに1994年(平成6年)にはユネスコの世界遺産(世界文化遺産)に「古都京都の文化財」として登録されている。

徳川家康の将軍宣下に伴う賀儀と、徳川慶喜の大政奉還が行われ、江戸幕府の始まりと終わりの場所でもある。

日本の歴史書において「二条城」と呼ばれることのあるものは複数ある。

当時の二条大路は朱雀大路が廃れた後、都一の大路であり、足利尊氏から義満まで3代の将軍が二条に屋敷を構えたため、将軍家の屋敷を「二条陣」または「二条城」といった。

室町時代に平安京の左京にあった唯一の城である。ちなみに右京にも唯一、「西院城(さいのしろ)」があった。二条城と西院城を平安京の両城ともいう。

◆さまざまな二条離宮。

1. 室町幕府13代将軍足利義輝の居城。「二条御所武衛陣の御構え」。
2. 室町幕府15代将軍足利義昭の居城として、織田信長によって作られた城。
二条通からは遠く離れていた。ただし平安京条坊制の「二条」(二条大路と中御門大路(現樫木通)に挟まれた地域)には城域の南部分がわずかに含まれる。義輝の「二条御所」とともに「二条」の名を冠して呼ばれるのはこのためと考えられる。
3. 織田信長が京に滞在中の宿所として整備し、後に皇太子に献上した邸「二条新御所」。
二条通にも面さず条坊制の二条にも属していない。二条家の屋敷跡に設けられたための呼称と考えられる。
4. 徳川家康が京に滞在中の宿所として造った城。これが現在の二条離宮跡。

◆天守閣

本丸の南西隅に、前年に一国一城令によって廃城とした伏見城の天守が移築された。この寛永期天守は、取付矢倉が付属する層塔型5重5階の天守であったが、1750年(寛延3年)に落雷で焼失して以来、再建されなかった。現在は、天守台のみが残る。

◆二条城を訪れた徳川将軍は、初代家康、二代秀忠、三代家光、十四代家茂、十五代慶喜、のみ。

◆大政奉還。

たった151年前に起こった政治的出来事。これが現在の日本国の独立、アジア諸国の独立の元。

この出来事の40年後に日露戦争。さらに40年後に大東亜戦争、太平洋戦争敗戦。さらに71年後が今。

大政奉還(たいせいほうかん)とは、江戸時代末期の慶応3年10月14日(1867年11月9日)に江戸幕府第15代将軍徳川慶喜が政権返上を明治天皇に奏上し、翌15日に天皇が奏上を勅許した政治的出来事である。

江戸時代、徳川将軍家は日本の実質的統治者として君臨していたが、形式的には朝廷より将軍宣下があり、幕府が政治の大権を天皇から預かっているという大政委任論も広く受け入れられていた。

幕末になると朝廷が自立的な政治勢力として急浮上し、主に対外問題における幕府との不一致により幕府権力の正統性が脅かされる中で、幕府は朝廷に対し大政委任の再確認を求めるようになった。

文久3年(1863年)3月・翌元治元年(1864年)4月にそれぞれ一定の留保のもとで大政委任の再確認が行われ、それまであくまで慣例にすぎないものであった大政委任論の実質化・制度化が実現した。

慶応3年(1867年)10月の徳川慶喜による大政奉還は、それまでの朝幕の交渉によって再確認された「大政」を朝廷に返上するものであり、江戸幕府の終焉を象徴する歴史的事件であったが、しかしこの時点で慶喜は征夷大將軍職を辞職しておらず、引き続き諸藩への軍事指揮権を有していた。

慶喜は10月24日に将軍職辞職も朝廷に申し出るが辞職が勅許され、幕府の廃止が公式に宣言されるのは12月9日の王政復古の太政官令においてである。

大政奉還の目的は、内戦を避けて幕府独裁制を修正し、徳川宗家を筆頭とする諸侯らによる公議政体体制を樹立することにあった。しかし大政奉還後に想定された諸侯会同が実現しない間に、薩摩藩を中核とする討幕派によるクーデターが起こったのである。

京都・二条城に招集し大政奉還を諮問した。10月14日(11月9日)に「大政奉還上表」を朝廷に提出すると共に、上表の受理を強く求めた。

摂政・二条齊敬ら朝廷の上層部はこれに困惑したが、薩摩藩の小松清廉、土佐藩の後藤象二郎らの強い働きかけにより、翌15日に慶喜を加えて開催された朝議で勅許が決定した。慶喜に大政奉還勅許の沙汰書を授けられ、大政奉還が成立した。

大政奉還は討幕派の機先を制し、討幕の名目を奪う狙いがあったものの、上表は薩摩藩らの最大の関心事であった将軍職辞任には一切触れておらず、なお慶喜は武家の棟梁としての地位を失っていなかった。

討幕の密勅の下賜(後述)以降、薩摩藩・長州藩は大規模な軍事動員を開始し、この動きを制するため慶喜は10月24日に征夷大將軍辞職も朝廷に申し出る。

幕府は、朝廷には政権を運営する能力も体制もなく、一旦形式的に政権を返上しても、依然として公家衆や諸藩を圧倒する勢力を有する徳川家が天皇の下の新政府に参画すれば実質的に政権を握り続けられると考えていたといわれる。

見通しの通り、朝廷からは上表の勅許にあわせて、国是決定のための諸侯会同召集までとの条件付ながら緊急政務の処理が引き続き慶喜に委任され、将軍職も暫時従来通りとされた。つまり実質的に慶喜による政権掌握が続くことになった。

実際に朝廷は外交に関しては全く為す術が無く、10月23日に外交については引き続き幕府が中心となっ
て行なうことを認める通知を出した。11月19日の江戸開市と新潟開港の延期通告、28日のロシアとの改税約書締
結を行ったのは幕府であった。

朝廷は慶喜に当分の間引き続き庶政を委任し、諸大名に上京を命じたものの、形勢を観望するため上京を辞
退する大名が相次ぎ、将軍職を巡る慶喜の進退に関し何ら主体的な意思決定ができぬまま事態は推移した。

11月中に上京した有力大名は薩摩・芸州・尾張・越前の各藩のみで、土佐藩の山内容堂が入京したのがよう
やく12月8日であった(王政復古クーデターが勃発するのはその翌日である)。

この間、土佐藩は坂本龍馬を越前藩に派遣するなど、公議政体構想の実現に向けた努力を続けていた。

他方、会津藩・桑名藩・紀州藩や幕臣らの間には大政奉還が薩摩・土佐両藩の画策によるものとの反発が広
がり、大政再委任を要求する運動が展開された。

◆倒幕派の対応

大政奉還上表の同日(10月14日)、岩倉具視から薩摩藩と長州藩に討幕の密勅がひそかに渡された。この密勅
には天皇による日付や裁可の記入がないなど、詔書の形式を整えていない異例のもので、討幕派による偽勅の
疑いが濃いものであった。

大政奉還が行われた時点においては、岩倉ら倒幕派公家は朝廷内の主導権を掌握していなかった。前年12月
の孝明天皇崩御を受け、1月9日に践祚した明治天皇は満15歳と若年で、親幕府派である関白・二条斉敬(徳
川慶喜の従兄)が摂政に就任した。

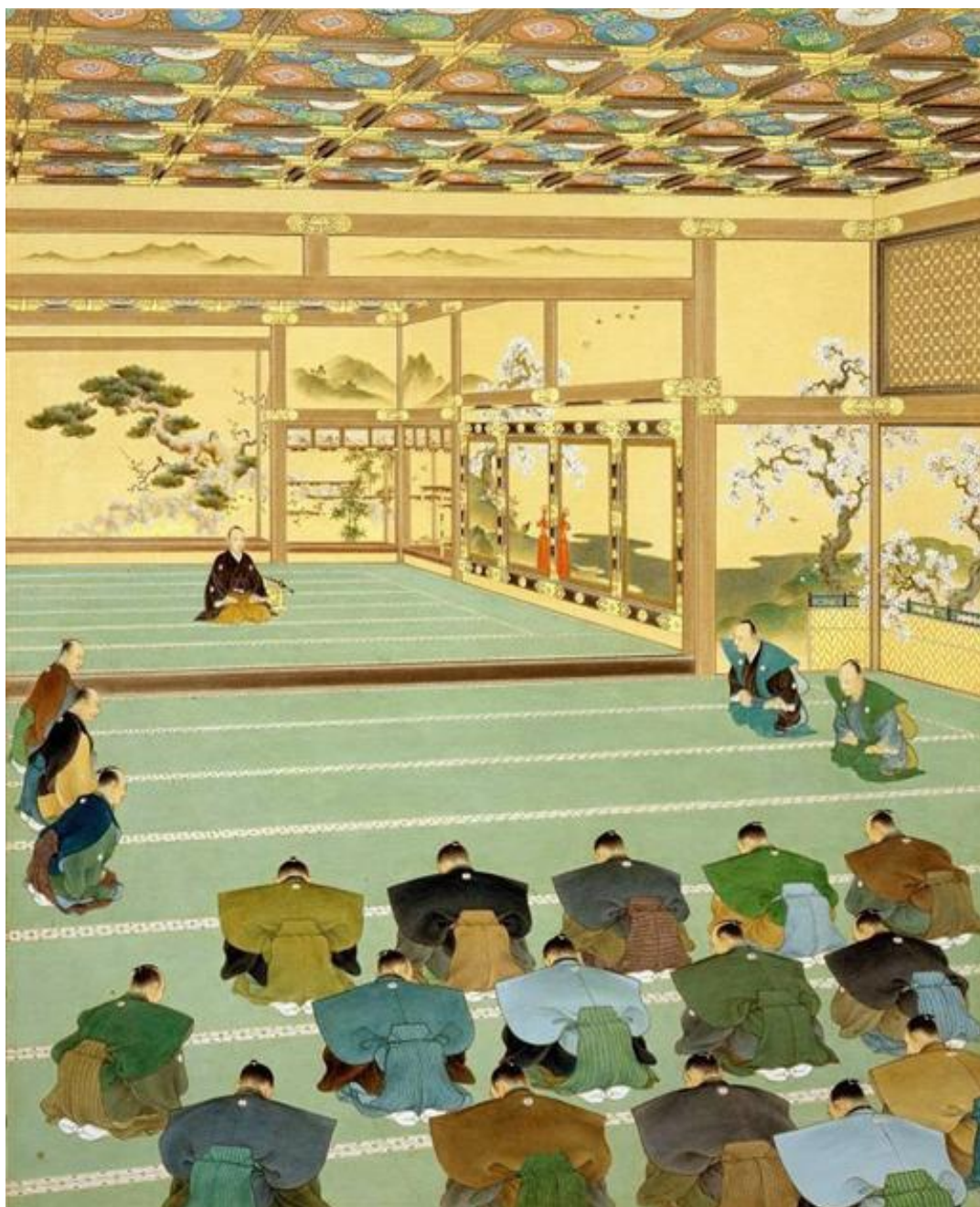
一方、三条実美ら親長州の急進派公家は文久3年八月十八日の政変以来、京から追放されたままであった。

つまりこの時期の朝廷は二条摂政や賀陽宮朝彦親王(中川宮、維新後久邇宮)ら親幕府派の上級公家によっ
てなお主催されていたのであり、大政奉還がなされても、このような朝廷の下に開かれる新政府(公武合体政府)
は慶喜主導になることが当然予想された。

薩長や岩倉ら討幕派は、クーデターによってまず朝廷内の親幕府派中心の摂政・関白その他従来の役職を
廃止して体制を刷新し、朝廷の実権を掌握する必要があった。

討幕の密勅は、朝廷内でいまだ主導権を持たない岩倉ら倒幕派の中下級公家と薩長側が、慶喜のそうした狙
いに対抗する非常手段として画策したものである。

密勅を受けた討幕の実行は、慶喜の速やかな大政奉還が朝廷に受け入れられたことにより、いったん延期と
なったが、薩摩・長州・芸州の3藩は再び出兵計画を練り直し、土佐藩ら公議政体派をも巻き込んで12月9日の
王政復古へと向かっていくことになった。



古都研資料集ホームページ: <http://www.good-news.jp/kotoken/>